

廓 の 愛

—「傾城買四十八手」について—

小 林 勇*

はじめに

私のお話は、他の先生方と異なりまして、書名を聞けば、読んだことはなくても一応知っている、といった作品が対象ではございませんので、まず作品の説明からさせていただかないといけなйдらうと思います。そこでこの『傾城買四十八手』という作品は、洒落本と申しますジャンルに属しますが、洒落本というジャンルの御説明から始めたいと思います。

洒落本について

江戸時代には、皆様もご存じのように、自由恋愛と申しますことは、原則として御法度でございました。そのかわり、というわけでもございせんが、廓、遊里というものが存在いたしまして、男性はそこで擬似的な恋愛を楽しむことができたわけでございます。そうした廓というものの存在自体をけしからんとお考えの方も、もちろんいらっしゃると思いますが、当時はそれが当たり前でございました。そこでは金銭と引き替えに恋愛が行われるわけでございます。ですからさまざまな悲劇も起こります。それが文学の絶好の対象となるわけでございます。皆様がよくご存じと思われますものでは、たとえば近松門左衛門の浄瑠璃などには、そうした悲劇が多く描かれております。

ここで取り上げます洒落本と申しますジャンルも、そうした遊里を対象とした小説でございますが、そうしたお芝居のような悲劇を描くものでは

ございせん、ちょっとした廓遊びの様子をスケッチしてみせるといったようなものでございます。資料には原本そのものからコピーをいたしておきましたが、何分二百年以上昔の本でございますので、大分汚れておりますので、ここにはその複製を持って参りました。だいたいは、こういう、お習字に使用す半紙を四つ折りにした大きさで、今日の文庫本ほどの大きさ、当時の呼び方では小本と申しました大きさです。表紙はこれも大体、このような白茶色をいたしております。表紙をめくりますと、このようなきれいな模様がございせんが、これは元々袋であったものを、このようにここに張り付けてあるのです。挿し絵はそこにあげてありますが、大体一冊に一つぐらい。これは江戸時代の小説としては、随分少ないのです。絵が少ないのは、たかが廓遊びの小説ではございせんが、当時は知識人の読み物であったことを示しております。

作者について

この『傾城買四十八手』という作品の作者は、山東京伝と申します。江戸時代後期の小説家と申しますと、『東海道中膝栗毛』を書きました十返舎一九ですとか、『浮世風呂』の式亭三馬、『南総里見八犬伝』の曲亭馬琴などが有名で、皆様もご存じだと思いますが、彼らは皆この京伝を目標として作家活動に入ったのです。つまり現在ではあまり知られておりませんが、当時は一流の小説家であったのです。京伝はいろいろなジャンルの小説を書きましたが、なかでもこの洒落本が最も優れているといわれております。ただその洒落本が

* 神戸親和女子大学教授

現在では余りポピュラーではない、それは当然かもしれませんが、そのために今日ではあまり知られておりませんが、とにかく当時は一九や、三馬や、馬琴よりもずっと有名な作家でございました。その京伝の洒落本の代表作がこの『傾城買四十八手』です。

作品について

洒落本には、長く定型がございまして、大体きざな男と、まだ遊びなれない若者が一緒に吉原などに遊びに行く。そこできざな男はさんざんに冷遇され、逆にうぶな若者の方が遊女にもてるという筋立てで話が運んでゆくのが決まりでしたが、この『傾城買四十八手』という作品は、幾組かの客と遊女の、典型的な組み合わせの床での会話ばかりを集めております。ここでまた少し説明が必要かと存じますが、当時吉原などでの遊びは、座敷で、客と遊女に芸者や幫間などを加えてにぎやかに、お酒を飲みながら騒いで遊ぶ遊びと、その後で客と遊女が二人だけになる床での遊びとの、二段構成になっておりました。その床での遊びばかりを描いたものですが、いわゆるベッドシーンではありません。それも少しはありますが、それよりも客と遊女との会話から、二人の性格などを描き出すことを主眼としております。

序文

前置きが長くなりましたが、それでは作品を見てゆくことにいたします。まず序文がございます。いろいろと書いてありますが、「手」という言葉に関係してあれこれと書いてありますので、要するに遊女を思うままにするのは「手」であるというだけのことです。「手」とは「手管」、つまり恋愛のテクニックといった意味です。洒落本、あるいは江戸時代の戯作と呼ばれます小説の序文は、このようにほとんど意味のない言葉の遊びを主にしたものが多々ございます。次に挿し絵がありません。遊女が鯉に乗っておりますが、中国の伝説の

「琴高仙人」という仙人に見立てたものです。次に目次ですが、この中の「そはそはする手」は、タイトルだけで本文にはございません。

「しつぱりとした手」

いよいよ本文を見てゆきます。最初は「しつぱりとした手」というタイトルになっております。その下に二行に割って登場人物の紹介がございます。この作品は洒落本によく登場する典型的な客と遊女の組み合わせをいくつか描いておりますが、ここでは「客はむすこ」とあります。「むすこ」とは洒落本では「息子株」とも申しますが、相当に裕福な商家の息子で、まだ遊びの経験が少ない、うぶな青年をさします。相手の遊女は「つき出し間のなき中三」とございます。これも少し説明が必要ですが、遊女は通常はまだ小さい子供の時に売られてきて、先輩の遊女に従ってその世話をしながら遊女としての修行をして、客の相手ができるまでに成長すると遊女となるわけですが、そうではなくてある程度大きくなってから売られてきますと、「寮」という遊女屋の別荘で、遊女としての訓練を受けた後、いきなり遊女となりますので、それを「突き出し」と申します。「中三」は「昼三」のことで、「昼三」とは昼間の揚げ代が三分ということで、当時の吉原は昼夜二部営業でございますが、もっとも昼間に遊ぶ客はあまりおりませんが、夜の揚げ代も三分です。三分とは一両の四分の三で、今日のお金では注にありますように、約七万五千円位にあたります。当時の吉原では最高級の遊女でした。この三分は揚げ代だけで、これくらいの高級遊女ともなりますと、そのほかに芸者や幫間を呼んだり、料理も特別にほかから注文したりと、相当なお金がかかります。ここではまだ遊びなれない青年と、あまり経験のない遊女の組み合わせという遊びを描いているわけです。

次に冒頭部分で遊女のスタイルを詳細に描いておりますが、この登場人物の外見を客観的に、詳細に描くというのが洒落本の大きな特徴です。また地の文をそのように二行の割書にしまして、登

場人物の会話を写實的に描くのが、洒落本のこれ
も大きな特徴でして、後に式亭三馬などに受け継
がれ、明治に入りまして新しい小説が生まれまし
た時に、口語を写すために採用された文体でもあ
ります。

客と遊女の会話は、この二人が、互いに相手に
気がありながら、まだどちらも遊びに慣れていな
いために、それと言ひ出しかねている様子を大変
うまく描き出してあります。遊女が思いきって客
に思いをうち明け、さあこれからというところへ
邪魔が入ります。「一座きゃく」とありますが、
吉原などへ初めて遊びに参りますときは、一人で
は行きませんで、大体先輩に連れて行ってもら
うのですが、その客です。「じつは大のはんかなり」
とありますのは、「半可通」といひまして、先程
申しましたきざな男です。ここでも遊女に振られ
て、連れの子のところに憂き晴らしにきたので
す。本文にありますような駄洒落を連発したり、
自分がどれほど吉原について詳しいかとか、有名
人に顔が利くかとかいっただことを自慢したがる
のが「半可通」の特徴です。しかし自分が邪魔にな
っていることには気づいておりません。ようやくそ
れに気づいて出てゆき二人がほっとしたところへ
「お向かい」が来ます。「お向かい」とは、吉原な
どへ遊びに来る客はこっそり来ていることもあり
ますから、朝まだ人が起きないうちに帰らないと
いけない場合もある。そういう時、遊びの案内を
します「引手茶屋」に「明日の朝何時に」といっ
たことをいっておきますと、その時刻に迎えに
来てくれるのです。で二人はいいところで別れな
ければならなくなったわけです。

最後に「**評**に曰」として、この章についての作
者自身の感想や補足説明がございませぬ。その最後
に「とかくけいせいはあどけなきを賞美すべし」
とありますが、これが、客が遊女に求めた最大の
ものであったと思われませぬ。この章はそうした遊
女とうぶな客との遊びを描いて、非常に優れたで
きばえのものかと思ひませぬ。

やすひ手

次は「やすひ手」、先程とはがらりと違った安っ
ぱい遊びを描きました章です。「客は山の手の通」
とありますが、山の手は当時旗本や御家人といっ
た幕府直属の武士たちが多く住んだところ
です。武士は江戸時代の公務員ですが、先祖代々
同じ給料をもらっておりまして、原則として昇給
ということがございませぬ。しかし平和な世の中
が続きまして、生活の方は段々贅沢になって参
りますから、当時の武士たちは経済的には困
っておりませぬ。それでも支配階級ですから威
張っている。お金がないせいで威張っているの
ですから、最もたちの悪い客です。相手の遊女
は小見世の座敷持とあります。当時の吉原には、
大見世、中見世、小見世という別がありまし
て、先程の章は大見世という格の高い遊女屋を
舞台としていたのですが、ここでは格の落ちる
小見世が舞台です。座敷持とは、自分の居室と
して次の間付きの部屋を与えられている遊女で、
注にありますように小見世では最高位の遊女
です。客は悪口ばかり言っておりませぬが、こ
の悪口がこの章の見所とあります。「評」に「こ
ふ云はだの客は、女郎をひいてあそぶをのみ
色男とさだめ」とありますが、「女郎をひく」と
いうのは、注にありますように、遊女の方から
金を出させることです。遊女が自分の好きな男
に、そういうもてる男は金のないものと相場が
決まっておりますが、金をやったりすることが
ありますが、このころは世の中が不景気でした
から、そういう遊女の方から金を出させるよ
うな遊びが色男の遊び方としてもはやされて
おりました。また小見世の女郎は自分がかつて
大見世にいたなどというものだが、小見世に
いるのを恥じての負け惜しみだというのは、
京伝の観察の鋭いところであると思われませぬ。

見ぬかれた手

次は「見ぬかれた手」という章です。客は「家
中もの」とありますが、注にありますように大名

の家来、当時参勤交代の制度のもと、各藩の大名たちが、国と江戸の藩邸との間を行ったり来たりしておりますが、多くの家来が国から一緒に江戸にやってくる、その家来であります。彼らは皆いわゆる単身赴任で、奥さんは国に残してきております。ですからどうしても女性が恋しくて、吉原などへやってくるのですが、そのせいでとかくしつこい。しかも田舎風丸出しなものでありますから、遊女にはもてないものと相場が決まっております。この章でもそうでした、「名代のある夜」とありますが、「名代」とは、一人の遊女に複数の客が落ち合ったとき、遊女が自分が相手をしている客以外の客に、自分の代わりに出しておく遊女で、客はこの名代とは一切交渉を持ってはならないというのが決まりでした。客は今か今かと遊女の来るのを待っておりますがっこうに現れません。ついに堪忍袋の緒が切れて真夜中に帰ると言い出しますが、これは野暮な客のおさまりのパターンです。遊女は客が帰るというのを聞いてやっと姿を現しますが、この客を完全になめておりますから平気でなだめます。客も駄々をこねておりますが、女性には弱くてすぐに相手の思うままになってしまいます。

「評」には、これだけ腹を立たせるほど一人の客のところにも長くいたのは、当然その遊女の好きな色男の客かと思うと、そうではなくて、「床花」、客は通常同じ遊女に三回会って初めて「馴染み」という関係になりますが、この時に遊女に祝儀を出します、それを「床花」と申しますが、それをもっていたためにサービスをしていたのだということで、この遊女のがっちりした性格を描いております。また「此客は、げいしやが三味せんをひくと、かならずきせるで茶わんをたゞく人なり」といっていますのも観察の細かいところであるかと思えます。

真の手

最後に「真の手」という章がございます。いたい廊での男女関係は、あくまでも客がお金を払っ

て遊ぶという関係ですが、そこは男と女のことでございますから、遊びが遊びでなくなってしまう、本当の恋愛関係になってしまうということもございます。そうすると何せお金がかかりますから悲劇の始まりということになります。浄瑠璃などで心中に走る男女はたいていこういう関係であるわけですが。この章は「女房にもならふといふ女郎。しやうといふ客」とありますように、そういう客と遊女の関係を描いております。そしてそれを「真の手」と呼んでいる。遊びはどこまでも遊び、というのが従来の洒落本の基本姿勢でありましたが、この作品の作者京伝は、前後二度結婚しておりますが、相手はどちらも吉原の遊女であった女性です。ですからこういう関係を共感を持って描いているのであらうと思われます。

舞台は「天気の良い日の、居つゞけの座敷」とあります。「居続け」とは、夜遊びに来た客が翌朝になっても帰らずにそのまま遊び続けることです。もちろん揚げ代は別にかかります。「居続け」は朝雨が降っているから帰れないといった口実ですることが多いのですが、ここは「天気の良い日」ですから、そういった口実はなにもなくて、ただ二人が一緒にいたいのが為のものであることをはっきりさせております。芸者や他の遊女が登場しておりますが、やがて昼見世の時間になります。先程も申しましたように、昼間に遊ぶ客は少ないのですが、遊女たちは一応見世に出ます。そうすると遊女たちの部屋がある二階には人気なくなって寂しくなるのですが、そうした中で相思相愛の関係にある客と遊女の会話が描かれます。

二人になるとお金を巡っての深刻な話になります。客は三十両以上の借金が茶屋に対してあるといっております。二人で金策をあれこれ考えて、その中で遊女がこの客に対してどれだけ思いを寄せているかといったことも描き出されております。ですが最後には、濡れ場となり、遊女が客の子供を身ごもっていることが示唆されて、深刻なままでは終わっておりません。そこに救いがあると思われます。「評」ではこうした関係を、よそからは馬鹿馬鹿しく見えても当人たちにとってはもっ

ともな理屈もあるだろうか、愛情を込めて述べております。これも従来の洒落本では、作者は概して登場人物に対して冷淡なところがありましたが、作者の登場人物に対する愛情のようなものが見られるのが京伝の洒落本の特徴です。

おわりに

以上、時間の制約もございまして、あらあらではございましたが、『傾城買四十八手』という作品を見てまいりました。客と遊女との典型的な関係をいくつか描いておりました。はじめにも申しましたように、廓というものの存在自体がけしからんという見方もあるものと思いますが、そこで繰り広げられた恋愛模様的一端でございます。拙いお話ではございましたが、洒落本という、あまり皆様になじみのないジャンルの作品に少しでも触れていただければという思いから、この作品を取り上げました。これで私のお話は終わらせていただきます。

(注) 当日は新編日本古典文学全集『洒落本 滑稽本 人情本』所収『傾城買四十八手』の全文を資料として受講者に配布した。上記文章中「注」とあるのも同書の注釈を指す。